

母親の「子どもの心に目を向ける傾向」の発達的变化について — 生後5年間に亘る縦断的検討 —

京都大学大学院教育学研究科 篠原郁子
(現所属：白梅学園短期大学)

Stability in Maternal Tendency to Focus on Child's Mental World; From 1st to 5th Year of Child's Life

Graduate School of Education Kyoto University SHINOHARA, Ikuko
(Shiraume Gakuen Colledge)

要 約

母親が子どもの心に焦点化し、感情や思考といった心的経験に注目しながら子どもを理解しようとする傾向について、乳児期から幼児期における検討を行った。生後1～5年目に亘る縦断的調査を行い、子どもが0歳時に母親の mind-mindedness (MM:乳児の言動に心的状態をつい帰属する傾向) を、4歳時に Insightfulness(子どもの言動の背景に心的状態を想定し、適切に読みとる傾向)を測定し、関連を分析した。その結果、MMは、後の Insightfulness として、幼児の心に対する多面的な見方や豊かな語りと連続していた。しかしMMは、幼児の感情や思考に対する受容的であたたかい見方とは関連していなかった。乳児期に見られる母親の特徴は幼児の心的世界への見方を一概に予測するものではなく、側面ごとに連続性と不連続性があることが示唆された。

【キー・ワード】 心的状態の読みとり, mind-mindedness, 母子関係, 縦断研究, 個人差

Abstract

This study examined the stability in maternal tendency to focus on a child's mental world. When an infant was 6 months old, his/her mother's mind-mindedness (MM) was measured. MM is the tendency to attribute some mental states for an infant. The mother was followed up 4 years later and her Insightfulness (the capacity of insight into child's thought and feeling) was assessed. Results showed that MM was positively correlated with complex view of child's inner world and rich in detail answer in Insightfulness assessment interview. However, MM negatively related to the degree to which mother focus on and try to understand child's inner experience. The continuity and discontinuity of maternal way of viewing the child's internal world was discussed.

【Key words】 maternal view of child's mental world, mind-mindedness, mother-infant

relation, longitudinal study, individual difference

問題と目的

乳児のメンタライジング能力、特に自他の心の理解の発達について、子どもの個人内における成熟という点のみならず、他者との社会的相互作用の文脈の中でとらえる視点が注目されている (Repacholi & Slaughter, 2003; Fonagy, Gergely, & Target, 2007)。こうした社会的関係性について特に、発達早期に構築され後の人生に亘り一定の影響を持つと目されているものに、アタッチメントがある。乳児はそもそも人に対する高い志向性を持つ存在であるが、誰にどのように近接し、如何なる関係を築くかという点は、個々の「乳児 - 大人」対において様々である。そして、主要な養育者との間に安定したアタッチメントを持つ乳児は、不安定なアタッチメントを持つ乳児よりも、その後の社会情緒の発達や、特に心の理解の発達に優れることが複数報告されてきた (Fonagy, Redfern, & Charman, 1997; Meins, Fernyhough, Russel, & Clark-Carter, 1998)。このため、安定型のアタッチメント構築が重視されるが、その安定性に影響する要因として、旧来、養育者側の要因が注目されてきた。それは Ainsworth らにより提唱された sensitivity 概念であり、養育者が乳児のシグナルに気づき、正しく解釈し、タイミングよく適切なやり方で反応する、という特徴を高く持つことである (Ainsworth, Blehar, Waters, & Wall, 1978)。しかし、その定義は、子どもから発せられるサインへの気づき、解釈、行動的応答とそのタイミングという多くの要素の集合体とも考えられ、どの側面がより主要な役割を担っているのかが明確でない。さらに、養育者の sensitivity と子どものアタッチメント安定性の関係は中程度の大きさにとどまるという知見が呈され (De Wolff & Izendoorn, 1997)、「sensitivity 再考」という議論が行われてきた。そうした中、複数の論者が共通して「子どもの視点から物事を見る能力 (see things from the child's point of view)」の重要性を強調するに至っている。この着想はもともと Ainsworth らによるものであるが、子どもに対する行動的応答の前提として、養育者がこうした子どもに対する見方を有していること自体が、より重要な意味を持つと考えられているのである (Fonagy & Target, 1997; Meins, 1997; Oppenheim & Koren-Karie, 2002)。こうして現在までに、母親の子どもに対する見方に焦点化した形で sensitivity の派生概念が提唱され、研究が開始されている。

こうした派生概念が共通して意識しているのは、子どもの視点から物事を見るために、子どもの内的な世界に目を向けるという点である。例えば Fonagy & Target (1997) は、母親が自他の内的な過程について思考する内省的な姿勢として「内省機能 (Reflective Function)」に着目し、この姿勢を強く持つことが実際に、子どもの安定したアタッチメントを説明することを示している。また Oppenheim らは、養育者が子どもの行動を行為レベルではなく、その背後にある感情や思考といった動機について考えながら理解しようとする傾向に着目し、これを「洞察性 (Insightfulness)」と名付けた。そして、母親の洞察性が子どものアタッチメント安定性と関連することを見出している (Oppenheim, Koren-Karie, & Sagi, 2001)。さらに Meins らは、母親が未だ幼い乳児に対しても、豊かな心の状態を有した存在としてみなす傾向を mind-mindedness (MM) と名付け、同じく、MMの

高さ子どものアタッチメント安定性の関連を報告している (Meins, Fernyhough, Fradley, & Tuckey, 2001)。特に、生後 6 ヶ月時に測定された母親のMMが、12 ヶ月時における子どものアタッチメント安定性を予測したこと、さらに、母親のMMと sensitivity の双方を測定した結果、MMの方がより子どものアタッチメントタイプの説明力を有することを明らかにした点が注目されよう。

このように、子どもに対する心を絡めた見方という養育者の特徴が、実際に安定型のアタッチメントの発達に寄与していることを裏付ける知見が蓄積されてきた一方、子どものメンタライジング能力の発達とアタッチメントとの関係についても、新たな議論が起こっている。というのも、より近年の研究からは、子どもの心の理解の発達、特に心の理論の獲得に関して、アタッチメント安定性が関連していないことを示唆する結果が得られているためである (Meins, Fernyhough, Wainwright, Das Gupta, Fradley, & Tuckey, 2002; Ontai & Thompson, 2006)。そして、アタッチメントよりもむしろ、養育者が示す子どもに対する「心理学的な見方」という特徴が、アタッチメントと心の理解の発達のそれぞれに直接的に寄与し、促進的に機能しているのではないかと考えられている (Fonagy, et al., 2007; Symons, 2004)。つまり、心の理解発達への影響因として、養育者が子どもの心に対して有する見方という特徴そのものへと焦点が移行しているのである。こうした流れは、子どものメンタライジング発達と、社会的相互作用との関連を問う研究による知見とも合致する。例えば、母親が日ごろ心に関する会話を多く行う程度が、子どもの心的理解発達を促進することを支持する知見は多い (Dunn, Brown, & Beardsall, 1991; Perner, Ruffman, & Leekam, 1994)。そして、子どもとの間で心を絡めた会話を行うという行動の背景には、そもそも子どもの心に目を向け、それについて思考しやすい、という認知的特徴があると考えられる。このように、子どもの心的理解発達を取りまく社会的環境の特質として、養育者が有している「心」に対するスタンスが注目されているのである。

そして現在、養育者の特徴による子どもの発達への影響を直接的に検証する研究が複数行われている。中でも Meins らは、4 歳および 5 歳の時点で子どもが示す心の理論課題の成績を、子どもが生後 6 ヶ月時点で測定されていた母親のMMが予測することを明らかにした (Meins, Fernyhough, Wainwright, Clark-Carter, DasDupta, Fradley, & Tuckey, 2003)。この知見により、MMは現在、発達最早期における心の理論獲得の促進因として重視されるに至っている。この報告は、二つの点で興味深い。一つは、その縦断的視点であり、母親による乳児に対する心的会話の豊富さが、4 年後、5 年後の子どもの発達を長期的に予測するというインパクトである。もう一つは、母親が示す「子どもの心に目を向ける傾向」を、乳児期に測定したという意味である。Meins (1997) はMM概念を提唱する中で、養育者が乳児の言動の背後に、大人と同じような複雑な心的世界があることを仮定するという点に触れている。つまり幼い乳児が、実際には大人のように明確にあるいは複雑な形で、意図や予測、願望や信念を持っていないとしても、乳児のつたない発声や身体の動きに触れた養育者はついつい、乳児の心の世界の存在を想定してしまうという現象である。では、「乳児の心」に目を向けやすいという母親の特徴は、その後、子どもが成長するにつれて実際に子ども自身の感情や思考を明確に持ち始めた以降、どのような形で存在していくのだろうか。実は、養育者が示す子どもへの心理学的な見方という傾向について、乳児期から幼児期という時間軸上の検討は実施されていない。Meins ら (2003) が示すように、乳児期における母親の特徴が、その後、長期的に子どもの発達を予測する

ならば、その年月の間、何故そして如何なる形で子どもに影響しているのかを明らかにすることが必要であろう。これは、子どものメンタライジングの発達を、幼児期における心の理論獲得という一時点で捉えるのではなく、乳児期から漸次的に進むプロセスであると考えられる視点とも重なる。つまり、子どもが直接的に経験する養育環境の特質として、乳児期から幼児期に亘って母親の特徴をとらえていくことが求められる。

そこで本研究では、乳児期に測定される母親のMMが、子どもが幼児期に至った時点で母親が示す子どもの心に対する見方の特徴をどのように予測するのかを検討することを目的とする。具体的には、篠原(2006)において子どもが生後6ヵ月時にMMを測定された母親を追跡調査し、幼児期において子どもの心的世界への焦点化のしやすさを再び測定することとした。

なお、MMについて篠原(2006)は、6ヵ月児の母親を対象に乳児のビデオ刺激を呈示し、乳児に心的帰属を行う(乳児の意図や感情、思考について述べる)頻度を測定した。その結果、5つの共通刺激に対する心的帰属の回数には、母親間でばらつきが見られることが明らかとなった(平均9.05回, SD:3.52, レンジ2-20回)。そこでこの母親群を追跡調査し、子どもが4歳になった時点における、子どもの心的世界に目を向ける程度との連続性を問うこととした。幼児の心に対する母親の見方を測定するために、Insightfulnessに着目し、測定のためのインタビューを行う。子どもの行動の背景に、子どもなりの意図や思考、動機を想定する程度を測定するインタビューを行い、母親の語りの特徴を10の評定尺度に基づき捉える。特に重要な尺度として「複雑性(子どもの心的世界を多面的に捉える)」「洞察性(子どもの視点から行動の動機を考えようとする)」「受容(子どもの良い面も難しい面も受容する)」「開放性(開かれた姿勢で子どもを見て、新たな気づきを得る)」といったものがある。その他、インタビュー中における子どもへの「焦点」の持続、子どもの心的世界と母親自身のそれとの「分離」の度合、語りの「一貫性」と「豊かさ」、子どもへの「敵意」や過度の「心配」の無さ、といったものが設定され、母親の特徴を多面的に捉えることが可能である。そして、10の評定尺度の得点パターンから母親の全体的特徴として、Insightfulnessに富むタイプ(Positive Insightfulness: PI)と、Insightfulnessが限定的で十分でないタイプ(One Sided: OSと、Disengaged: De)への分類が行われる。本研究では、母親の特徴を多側面から捉えることで、乳児期に測定されたMMがどのような形で4年後の母親の特徴を予測しうるのかを詳細に探るため、3つのタイプと評定尺度ごとの得点に着目し、検討を行いたい。幼児の心的世界に対する目の向けやすさについて、特にPIタイプならびに「複雑性」「洞察性」「開放性」「焦点」「語りの豊かさ」得点などはMMと連続していると予想されるため、この点を検証することを目的とする。

なお、母親のInsightfulnessについて、この尺度を用いた国内の研究は行われていないことから、その基礎的知見を得ることも併せて行いたいと考える。母親が示す特徴に影響を及ぼす要因として、子どもの属性(性別・出生順位)および母親の属性(教育歴)に関する分析を実施する。こうした影響因との関連を考慮したうえで、2時点で母親が示す特徴の関連性について問うこととした。

方 法

研究協力者

4歳児とその母親30組。子どもについて、女兒16名、男児14名、平均月齢は50ヵ月9日（レンジ47ヵ月1日～57ヵ月10日）であった。出生順位は、第1子が16名、第2子以降が14名であった。母親について、平均年齢は35歳6ヵ月（レンジ24歳～45歳）であった。なお、これらの母子は、子どもが生後6ヵ月時に実施されたMM測定実験（篠原,2006）への協力者である。

手続き

①母親と子どもの属性

母親の教育歴と、今回の調査対象となった子どもの性別ならびに出生順位を紙面で問うた。母親の教育歴については6件法で質問を行った（1：中学校卒業，2：高校卒業，3：専門学校卒業，4：短大卒業，5：4年制大学卒業，6：大学院卒業以上）。

②母親の Insightfulness の測定

研究者が各家庭を訪問し、Insightfulness Assessment インタビュー（IA: Oppenheim & Koren-Karie, 2004）を実施した¹⁾。IAでは、異なる3つの場面における子どものビデオ映像を使いながら母親に半構造化インタビューを実施する。そこでまず、研究者と子どもの遊び場面（5分間）、母子による遊び場面2種類（各10～15分）を撮影した。母子遊びの内容は、小さなボールを運ぶゲームと、ネコの家族の人形を使ったお話作りであった。撮影終了後、母親へのインタビューを行った。撮影したビデオ3種を数分ずつ呈示し、それぞれの場面について、子どもの感情や思考、動機、ならびに母親自身がビデオの子どもの様子について感じたことなどを問う一連の質問を行った。

インタビュー全体に亘る語りの特徴について、10の評定尺度の得点定義に基づき評点を付した（1点～9点）。10の評定尺度と内容を表1に示す。これらの得点分布から、子どもの心理状態をバランスよく多面的に洞察するPIタイプ、子どもの心について多くを語るが内容が偏るOSタイプ、子どもの内面に目を向けにくいDeタイプに分類を行った。

表1 Insightfulness Assessmentにおける評定尺度の内容

尺度	内容
1. 複雑性	子どもの多様な感情や思考の内容に目を向け、子どもを多面的に捉えようとする。良い面も難しい面も含めて、子どもの全体的な人間像を語ろうとする。
2. 焦点化	インタビュー全般に亘り、子どもの内面や特徴を理解し語ろうとすることに焦点を保つ。母親自身の事や他の関心ごとに話題が逸脱しない。
3. 洞察性	子どもの行動の理由や、背景にある動機、思考、感情について理解しようとする。
4. 受容	子どもの行動やその動機を受け入れ、子どもの良い面だけでなく、困難な面についても理解し受容しようとする。
5. 怒りと敵意 ^a	子どもに対して(たとえ過去の出来事であっても、まるで今現在のことのように)怒りや敵意を向け、子どもの行為を悪意あるものとみなす。
6. 心配 ^a	子どもの特徴や能力、あるいは母親自身の事柄について強い心配や懸念を示す。
7. 自分と子どもの分離	子どもを独立した一人の人間とみなし、母親とは異なる要求や願望を持った存在としてとらえる。
8. 開放性	開かれた姿勢でビデオを見る。子どもについて母親が有している既存の見方と、ビデオ呈示された子どもの姿を比較しながら、子どもについて深く理解しようとし、新しい気づきを得ることもある。
9. 語りの豊かさ	子どもについての問いに、豊かな情報を伴いながら詳細かつ明確な回答を示す。
10. 語りの一貫性	子どもの多様な側面にふれながらも、インタビュー全体に亘り、矛盾なく一貫した形で子どもについて語る。

^a注:「怒りと敵意」と「心配」の項目は、得点が中程度～低得点(敵意や心配がない)のほうが、Insightfulnessに富んでいると解釈される尺度である。
 ※特に、1. 3. 4. 8の得点の高さがPIの特徴となる。

結果と考察

①母子の属性と母親のInsightfulnessの関連

母親のInsightfulness尺度得点の記述統計量を表2に示す。また、タイプ分類についてはPIが14名(46.7%)、OSが7名(23.3%)、Deが9名(30.0%)であった。

表2 Insightfulness 尺度得点の記述統計量(N=31)

	平均値	標準偏差	レンジ
複雑性	5.58	1.46	3-8
焦点化	7.16	1.42	4-9
洞察性	4.97	1.49	3-7
受容	5.94	1.59	3-8
怒りと敵意	1.94	1.39	1-6
心配	3.13	1.48	1-8
自分と子どもの分離	6.87	1.61	3-9
開放性	5.39	1.38	3-8
語りの豊かさ	5.71	1.64	3-9
語りの一貫性	5.71	1.62	3-8

まず、子どもの性別による *Insightfulness* の差の有無を検討した。3つのタイプ分類に性差は見られなかったが、「分離」得点についてのみ、子どもの性別による有意な差が認められ、子どもが男児の場合よりも、女児の場合の方が得点が低かった ($t(29) = 3.322, p < .01$)。

この結果について、母親にとって、同性の子どもの欲求や感情を考える方がより自分のそれと同一視しやすい傾向にあるのではないかと考えられた。逆に男児の母親の場合、インタビューの中で「男の子だから…」 「男の子の遊び方では…」といった表現を用いながら子どもの行動や特徴を理解しようとする様子が散見された。このため、男児の母親の場合には性別を手掛かりに、子どもの独自性を意識しやすかったとも考えられた。ただし、分離得点に関して、男児の母親の平均得点が 7.79 点、女児の母親が 6.12 点であり、女児の母親の得点も中程度のものであった。つまり、子どもの欲求や思考を母親のそれと完全に一体化させる、あるいは親子の役割が逆転し母親が子どもに依存する、といった問題を呈すほどの低い得点ではなかったことに触れておく。

子どもの出生順位との関係について、3つのタイプに差はなかったが、「受容」、「開放性」得点に有意な差異が認められ、何れも第2子以降の子どもの場合の方が、第1子の場合よりも得点が高いことが示された(順に、 $t(29) = -3.053, p < .01$, $t(29) = -2.764, p < .05$)。

この結果に関して、第2子以降の子どもについての語りでは「お兄ちゃんは…だったけれどこの子はこうなのね」「お姉ちゃんもそうだったから、この子も…」といったきょうだいとの比較に基づく説明が見られた点が注目された。「受容」尺度には、子どもの良い側面だけでなく、母親にとって受け入れ難いと思われる側面をも、理解し許容する態度が含まれている。きょうだいがいる場合、比較を通してそれぞれの子どもの特徴に気づき一人ひとりを受けとめていくこと、あるいは、成長により子どもが変化し可能性を伸ばしていくことを信じていくことが、より容易になっているのかもしれない。「開放性」についても、きょうだいとの比較という視点から、子どもの内面や特徴について捉えようとする姿勢が強く見られたと考えられる。また、「普段、下の子(本調査の対象になった子ども)だけとこんなにじっくり関わることがなかったので…」という母親の声に表れるように、インタビューおよびビデオ撮影により改めて子どもの様子を見る機会に触れたことが、子どもについて新たな気づきを得ようとする姿勢の背景になっていたとも考えられた。

次に、母親の教育歴と *Insightfulness* との関連を検討した。なお、母親の教育歴の平均値は 3.74 ($SD: 1.25$) であった。まず、PI, OS, De の順に教育歴が高く、群間の得点差に有意差 ($F = 3.439$ (2.27), $p < .05$) が認められた (PI > De, OS > De, それぞれ $p < .05$)。また、「洞察性」「開放性」「一貫性」得点に関して教育歴の高さと正の相関が認められた(順に、 $r = .434$, $r = .394$, $r = .394$, 全て $p < .05$)。

教育歴と *Insightfulness* については、正の関連を示す先行知見 (Oppenheim & Koren-Karie, 2004) と、関連がないことを示す知見 (Oppenheim, Goldsmith, & Koren-Karie, 2004) の両方が報告されている。インタビューは言語に依存した方法であるという点から教育歴との関係が予想されたが、本研究では3つの尺度についてのみ中程度の正相関がみられた。教育歴は特定の面に関係するが、*Insightfulness* の全側面に影響するものではないと考えられた。

②乳児期と幼児期の母親の特徴の関連

子どもが生後6ヵ月時に測定された母親のMM(篠原, 2006)と、今回測定されたInsightfulness尺度得点の関係を問うべく、ピアソンの積率相関係数を算出した。結果を表3に示す。また、3つのタイプとの関連について、MM得点の平均はPIが7.11点、OSが11.4点、Deが9.36点であった。3グループの間のMM得点の差に有意傾向が示され($F=2.634(2.27)$, $p<.10$), OSはDeよりも得点が高い傾向があった。MM得点の高さと、後のPIタイプのつながりを支持する結果は得られなかった。そこで次にMMと下位尺度との関連パターンに注目しながら考察を行う。

表3 母親のMMとInsightfulness尺度得点の相関

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
1. MM得点	-										
Insightfulness											
2. 複雑性	.414*	-									
3. 焦点化	-.324 ⁺	.309 ⁺	-								
4. 洞察性	.337 ⁺	.852**	.223	-							
5. 受容	.141	.650**	.227	.701**	-						
6. 怒りと敵意	-.298	-.360*	.124	-.354 ⁺	-.500**	-					
7. 心配	.268	-.160	-.313 ⁺	.002	-.252	.443*	-				
8. 分離	-.274	.161	.434*	.109	.231	-.168	-.414*	-			
9. 開放性	.020	.680**	.376*	.765**	.724**	-.230	-.205	.188	-		
10. 豊かさ	.374*	.773**	.136	.705**	.466**	-.170	.016	-.179	.581**	-	
11. 一貫性	.300	.797**	.225	.741**	.563**	-.187	-.012	.113	.663**	.698**	-

** $p < .01$ * $p < .05$ + $p < .10$

MMと「複雑性」および「語りの豊かさ」の関連については、仮説を支持する結果を得た。つまり、乳児の行動の背景に様々な心的状態を想定し、それを豊かに報告する母親は、4年後、子どもが幼児期に至った際にも、子どもの行動の動機を多側面から理解しようとし、詳細に語る特徴を有していることが見出された。これより、MMとして捉えられた母親の特徴は、その後も個人内に認められるものと考えられた。また、有意傾向ではあるが「洞察性」との相関も認められたことから、乳児への心的帰属の行きやすさは、幼児の感情や思考に目を向け、内的な動機を探りながら子どもを理解しようとする傾向につながっているものと考えられた。

一方、「焦点化」得点、即ち、子どもの内的状態や特徴について問われるインタビューの中で、子どもについて思考しようと集中する程度は、予想に反してMMの高さとは負の相関関係にあることが明らかとなった。「焦点化」得点の低さの特徴は、話の焦点が母親自身の心配ごとや不安、あるいは、調査対象ではない他の子ども(きょうだい等)や家族(夫など)の話題へと移行していき、話者である母親自身がそのことを十分に認識していないという点にある。本調査で「焦点化」得点が低い語りの多くは、子どもの行動の動機を探るよりも、子どもに対して母親自身が感じた困惑や不安、反省を

語ることが中心になってしまうというパターンであった。この点を考慮すると、MMが高い母親は、子どもだけでなく、自分自身の心的世界についても同様に、目を向けやすいという特徴を有しているのではないだろうか。ただし、MMと「分離」得点には直接の関連は見られないため、高いMMを持つ母親の語りは焦点が移行しやすいとしても、必ずしも母親自身の思考と子どもの内的世界が混在したり同一化したりしてしまう訳ではないだろう。むしろ、子どもについて思考することが、母親自身に対する内省的態度を半ば自動的に活性化させ、子どもの視点に立つことを難しくさせてしまう可能性が考えられた。

また、MMと関連が見られなかったものに「開放性」得点があった。これは、ビデオ呈示された子どもの様子を深く理解しようとする姿勢で、母親が有している子どもへの既存知識を利用するのみならず、子どもが示す行動から新たに、子どもの動機や特徴を学ぼうとする態度である。この「同化と調節」の双方が「開放性」尺度の鍵であるが、一方、MM概念においては、仮に乳児の側に明確な意図や欲求という心的世界が確立していなくとも、乳児の言動について心の存在を（養育者側がある意味で「一方的に」）絡めてしまうという点に特徴がある。こうした差異が、今回両者に関連が見られなかったことの背景にあるのではないだろうか。さらに、「受容」「敵意」「心配」といった子どもの心的世界に対する母親の思考の内容的な特徴については、MMとの関連は認められなかった。MMは幼い乳児の（幼児と比較するとかなり限定されたレパトリーしか持たない）行動を母親が自由に解釈するものである一方、「受容」得点などは、時に母親の予想や願望とは異なる多様な子どもの行動を、子ども自身の意図を汲みながら理解し受け止める、という点で大きく異なるためではないかと考えられた。

総合考察

本研究の目的は、母親が子どもの心的世界に目を向け、子どもの感情や思考といった内的過程を考える傾向について、生後1年目に測定された特徴が後の幼児期における子どもの心に対する見方をいかに予測しうるのかを検討することであった。具体的には、子どもが生後6ヵ月時に測定された母親のMMと、生後48ヵ月時に測定されたInsightfulnessの関連を分析した。

Insightfulnessについて、はじめに、尺度得点と母親および子どもの属性との関連について基礎的知見を得た。母親のInsightfulnessと子どもの属性についてはこれまで検討されていないため、今後、他のサンプルに基づく知見との比較も必要であると思われる。なお、今回見出された母子の属性とInsightfulnessの関連パターンを、MMのものと比較すると、異なる特徴を持つことが伺えた。篠原(2004)は、子どもの性別および出生順位と母親のMMは関連していないことを報告している。また、MMに関して補足的分析を行った結果、母親の教育歴とも有意な関連を持っていなかった。背景要因との関連の仕方という点で、母親のMMとInsightfulnessには差があることが示唆され、両者は母親が子どもの心に目を向ける傾向を扱うものでありながら、それぞれ異なる点を含む概念であるとも考えられた。

次に、MMとInsightfulnessの関連に関する結果を考察する。本分析から、乳児期に測定された母

親のMMの高さは、幼児期に至っても、子どもの内的な世界を様々な角度から多面的に理解しようとし、豊富な情報とともに語るという尺度得点とは関連していることが明らかとなった。4年間という時間を経てもこうした連続性が見られたことは、子どもが育つ社会的環境の一貫性という点で注目されよう。

しかし、幼児期に測定された母親の「受容」「開放性」との無相関という結果から、乳児に対する母親側からの心的帰属、およびその量的豊富さに着目して測定されたMMは、後の、受容的で正確に情報を得ようとするような子どもの心の理解の仕方を予測するものではないことが明らかとなった。さらに、MMと「焦点化」得点は負の相関を示し、MMの高さは幼児の心について子どもの視点に立った洞察を行う特徴とはむしろ異なるベクトルを持つことが示唆される結果を得た。そして、こうしたMMと各下位尺度との相関パターンが、MMの高さが必ずしも後のPIタイプを予測しないという結果の背景であると考えられる。乳児に対するMMと、子どもに対するあたたかさや正確な心の理解は、おそらく異なる側面なのではないだろうか。今回得られた結果をまとめると、乳児への心的帰属傾向というMMは、その後の子どもの心に対する豊富で多面的な見方には連続し、しかし一方で、その心の理解の内容としてのあたたかさや子どもの視点に立った適切さという点にはつながらないと解釈されよう。では、子どもが乳児期において既に、母親個人内で、量的に豊富な心的帰属傾向と、受容的態度や開放的な子どもの見方といった特徴が独立して存在しており、それぞれが後に連続していくのだろうか。本研究では、乳児に対するMMという指標のみが変数であったが、今後、複数の指標を用いて乳児の母親の特徴をとらえ、時間軸上における変化を検討することが求められる。

最後に、今後の課題と展望を述べる。まず、本研究では子どもの心に対する母親の認知的特徴に注目したが、その安定性や変化が、子どもへの具体的な働きかけにどう作用しているのかを問うことが必要であろう。「子どもの心に目を向ける傾向」は、子どもへの言葉かけや、行動にも一貫して何らかのバイアスを及ぼし続け、子どもが経験する社会的相互作用を特徴付けているのだろうか。また、母親の認知的特徴が子どもの社会情緒的発達やメンタライジング能力の発達にどのように影響するのかを明らかにする際、どの時期に測定された母親の特徴がより説明力を持つのか、あるいは、持続性という点が重要になってくるのかを検証することも必要であると思われる。今後、母親側の特徴の時間的安定性および変化と、子どもの発達を絡めた研究を実施することにより、こうした点が明らかになっていくと考える。

脚 注

- 1) Insightfulness Assessment の実施について、筆者は2006年7月にIAの開発者らが実施したワークショップを受講し、IAの実施手続きとインタビューデータのコーディングに関するトレーニングを受けた。

引用文献

- Ainsworth, M.D.S., Blehar, M.C., Waters, E., & Wall, S. (1978). *Patterns of attachment: A psychological study of the Strange situation*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- De Wolff, M.S., & van IZendoorn, M. H. (1997). Sensitivity and attachment: A meta analysis on parental antecedent of infant attachment. *Child Development*, 68, 571-591.
- Dunn, J., Brown, J., & Beardsall, L. (1991). Family talk about feeling states and children's later understanding of other's emotions. *Developmental Psychology*, 27, 448-455.
- Fonagy, P., Redfern, S., & Charman, A. (1997). The relationship between belief-desire reasoning and positive measure of attachment security (SAT). *British Journal of Developmental Psychology*, 15, 51-61.
- Fonagy, P., & Target, M. (1997). Attachment and reflective function: Their role in self-organization. *Development and Psychopathology*, 9, 679-700.
- Fonagy, P., Gergely, G., & Target, M. (2007). The parent-infant dyad and the construction of the subjective self. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 48, 288-328.
- Meins, E. (1997). *Security of attachment and the social development of cognition*. East Sussex: Psychology Press.
- Meins, E., Fernyhough, C., Russell, J., & Clark-Carter, D. (1998). Security of attachment as a predictor of symbolic and mentalising abilities: A longitudinal study. *Social Development*, 7, 1-24.
- Meins, E., Fernyhough, C., Fradley, E., & Tuckey, M. (2001). Rethinking maternal sensitivity: Mothers' comments on infants' mental processes predict security of attachment at 12 months. *Journal of Child Psychology and Psychiatry and Allied Disciplines*, 42, 637-648.
- Meins, E., Fernyhough, C., Wainwright, R., Das Gupta, M., Fradley, E., & Tuckey, M. (2002). Maternal mind-mindedness and attachment security as predictors of theory of mind understanding. *Child Development*, 73, 1715-1726.
- Meins, E., Fernyhough, C., Wainwright, R., Clark-Carter, D., Das Gupta, M., Fradley, E., & Tuckey, M. (2003). Pathways to understanding mind: Construct validity and predictive validity of maternal mind-mindedness. *Child Development*, 74, 1194-1211.
- Ontai, L. & Thompson, R.A. (2006). Attachment, Parent-child discourse and theory-of-mind development. *Social development*, 17, 47-60.
- Oppenheim, D., Goldsmith, D. & Koren-Karie, N. (2004). Maternal Insightfulness and preschoolers emotion and behavior problems: Reciprocal influence in a therapeutic preschool program. *Infant mental health journal*, 25(4), 352-367.
- Oppenheim, D. & Koren-Karie, N. (2002). Mothers' insightfulness regarding their children's internal world: The capacity underlying secure child-mother relationships. *Infant mental*

- health journal*, 23(6), 593-605.
- Oppenheim,D. & Koren-Karie,N.(2004). *The insightfulness assessment coding manual (1.1)*. Unpublished Manual.
- Oppenheim,D. , Koren-Karie,N.,& Sagi,A.(2001). Mother's empathic understanding of their preschooler's internal experience:Relations with early attachment. *International Journal of Behavioral development*, 25, 6-26.
- Perner,J.,Ruffman,T., & Leekam,S.L. (1994). Theory of mind is contagious: You catch it from your sibs. *Child Development*, 65, 1228-1238.
- Repacholi,B. & Slaughter,V. (2003). *Individual differences in theory of mind: Implications for typical and atypical development*. New York: Psychology Press.
- 篠原郁子.(2004). <mind-mindedness>個人差の規定因に関する探索的研究. *京都大学大学院教育学研究科 教育方法の探究*, 7, 48-55.
- 篠原郁子.(2006).乳児を持つ母親における mind-mindedness 測定方法の開発—母子相互作用との関連を含めて. *心理学研究*, 77(3), 244-252.
- Symons,D.K. (2004). Mental state discourse, theory of mind, and the internalization of self-other understanding. *Developmental Review*, 24, 159-188.

謝 辞

本研究の調査にご協力くださいましたお母様、お子さんに記して感謝申し上げます。また、論文執筆にあたりご指導いただきました、東京大学大学院教育学研究科 遠藤利彦准教授に御礼申し上げます。